

2022年6月4日(土)

老球の細道672号

今さらながらワンハンド(片手)シュート

会津バスケットボール協会 室井 富仁

新聞にバスケットボールのことが掲載されるのは至福である。それが試合以外の記事となればこれまた格別である。先日朝日新聞の【列島NOW】という紙面に「女子バスケット両手打ちは日本だけ?」という記事が掲載されていた。記事を書いた記者はバスケットボール経験者で、娘さんがミニバスケットボールでプレイしている。記事の主な内容を要約した。

*** 去年の東京五輪で日本代表の活躍に感動したが、驚いたことに、他国の女子選手がみんなワンハンドでシュートを打っていた。今まで「男子は片手打ち、女子は両手打ち」が常識と思っていた。**

*** 3月の「第53回全国ミニバスケットボール大会」で徳島代表の撫養(むや)ミニバスケットボールチームが小学2年から6年までの女子選手全員がワンハンドでシュートをしていた。クラブのコーチはワンハンドシュートにこだわって指導をしている。選手も「最初はボールがなかなかリングに届かなかった。でも、ワンハンドだと相手をかかわしてシュートが打てる」と話す。**

*** 日本バスケットボール協会指導教本によると「両手のメリットは飛距離だけ。片手は多様なメリットがある。具体的な利点として、シュート打点が高い。多様なシュートへ発展する。ボール操作が向上する」と明記されている。**

*** あるシュート専門のコーチは語る。「女子は両手という思い込みを打破したい。両手で打つ自由はあるべきだが、日本にしか残っていないガラパゴス化した技術です」**

実は同じようなことがかつて日本男子バスケットボールにもあった。第2次世界大戦後の1950年ハワイ二世チームが来日し、全国を転戦して日本のチームと試合をした。それまで日本のバスケットボールは男女ともにシュートは両手打ちが常識だった。その時のハワイチームが見せてくれたワンハンドシュートやドリブルワークは当時の日本バスケットボール界に衝撃を与えた。「我々は両手で投げても、なかなか入らないのに、彼らは片手で入れている・・・」と。(余談:私の中学の指導者は専門家だったが両手シュートだった)

当時の日本人は、ワンハンドシュートは体の大きい欧米人ための技術だと思っていたのが、日本人と体形の変わらないハワイチームがいとも簡単にやってのけているのを見て日本人でもできることを確信した。そしてその後、ワンハンドシュートは日本人の男子の常識となった。残念ながら女子はその波に乗れなかったのだろう。

「女子だから・・・」「体が小さいから・・・」という無意識の決めつけの刃が「できる」ことを「できない」ことにしてしまう。今できなくても、絶対に理にかなっていて、後々には必ず役に立つとわかっていること(例:ワンハンドシュート)は、今できなくても、できるようになるまでチャレンジさせることはコーチの責任である。

デカルトは「我思う、故に我あり」だが、オカルトは曰く「我思う、故に我できる」と。